

# プロジェクト報告書

実習先

関西巻取箔工業株式会社

プロジェクト名

MADE IN JAPAN のものづくりを世界に発信プロジェクト

- ・はじめに

6月から11月にかけて関西巻取箔工業株式会社にインターンに行かせていただいた。インターン生は大学京都コンソーシアムより4名、他団体より参加した香港からの留学生1名と計5名で活動した。活動プロジェクト名は「MADE IN JAPAN のものづくりを世界に発信プロジェクト」だ。その名の通り、関西巻取箔工業株式会社の箔を広報の力をもって国内外に発信するという内容である。

主な活動は10月16日、17日に開催されるワークショップにて展示、配布するフライヤー、動画の作成であった。また、これらの活動以外にもインターンが始まって間もない頃に各自が読んだ本の内容を説明する活動があったので、そちらについても報告する。

- ・本のシェア会（6月～7月）

4人をチームとして機能させるために、それぞれが1冊の本を読み、内容を共有する「本のシェア会」という場を受け入れ先の久保さんが設けてくださった。それぞれ、伊藤羊一（2018）『1分で話せ 世界のトップが絶賛した大事なことだけシンプルに伝える技術』SBクリエイティブ、中川淳（2008）『奈良の小さな会社が表参道ヒルズに店を出すまでの道のり。』日経BP出版センター、奥山清行（2007）『フェラーリと鉄瓶——一本の線から生まれる「価値あるものづくり」』PHP研究所、を1冊ずつ借り、一週間後に内容を共有した。自分が読んだ以外の本の内容を知ることができるだけでなく、本の内容を全く知らない人に対して、簡潔かつ限られた時間で説明するという経験も良い学びとなった。

- ・写真撮影（8月 夏期休暇中）

動画、フライヤーの素材を撮るために、まずは会社内の工場を見学した。色の作り方、色をフィルムにつける工程、梱包、発送準備など商品が作られる過程を一通り知った。見学後は動画内において皆伝えたいものが初めとは異なった様子であった。最初は会社の外側しか見ていなかったの、色使いがきれいな部分などに注目して作ろうと思っている人が多かった。しかし見学後は皆、関巻の「人」に焦点を当てていた。関巻の商品は職人さんの手や感覚、商品を丁寧に作り上げる人が関わってこそ作られるものであると感じたからである。

このように皆それぞれ工場内をあらゆる形でトリミングし自分なりに動画に組み入れて作り上げていった。

この見学を終えて、「どの部分を切り取ってどう伝えるのか」と考えることは話したり見せたりする上でとても大切な考え方であると感じた。今回であればカンマキという会社のどこを切り取ってどのように伝えるかということであったが自分に置き換えると自分のどこをどう切り取って相手に伝えるかという考えに当たると思う。写真というツールが、今回の活動で「見せる」ということにおいて自分を表すツールにも使えるということに気づくことができた活動であった。

- ・フライヤー作成（8月 夏期休暇中）

写真撮影でインターン生、社員の方、アートディレクターの方が撮った写真を集め、その中から特に良いものを選んでフライヤーを作成した。フライヤーのサイズは18×18cm、

紙質はつるつるとした光沢のあるものとマットな質感で少し厚みのあるものと 2 種類用意した。

画像①は完成したフライヤーの画像である。それぞれ全員が撮った写真を組み合わせたもの（左上）と、一枚の写真を使用した（右上、下）ものと 3 つのデザインで作られた。



(画像①)

(画像②)

完成したフライヤーは画像②のように一枚一枚更に上から箔を押していった。機械などを使用した箔押しではなく、アイロンを使って手軽に熱転写をしていった。紙の種類や箔、テープの種類によって綺麗に色が移ったり移らなかったりと組み合わせによって箔の付き方が変化した。箔を押したフライヤーは小さな額縁に入れ、10 月に開催されるワークショップにて来場者が希望した場合に配布することになった。

#### ・動画のワークショップ (8月 夏期休暇中)

アートディレクターであるたみおさんによって、全三回のワークショップが開催された。第一回目はリサーチの基本を学ぶ「しるワークショップ」である。このワークショップでは、まず 5 秒動画で伝えたいことを見つけるための講義が行われた。今回の 5 秒動画作成のテーマとなる関西巻取箔工業株式会社に対して、自分が心惹かれる点はなんであるのかを考える。そして、なぜその点に惹かれるのかを掘り下げる。そうすることで説明もしやすくなり、自分の心惹かれることを相手にも共感してもらいやすくなるのだ。

第二回目は、関西巻取箔工業における自分が心惹かれる点を絞り、伝えるための「ならべるワークショップ」である。動画で取り上げる心惹かれる点は、よりシンプルである方が良いということであった。なぜならシンプルである方が、より想像力を掻き立てることができるからである。また、いろんな要素を一気に伝えようとするとう動画の軸がぶれ、オリジナリティが失われてしまう。そのため動画のテーマは「○○な (形容詞) ○○ (名詞)」というように、シンプルで具体的なものである方が良い、という講義が行われた。

第三回目は、完成した5秒動画に説明を加える「ものがたるワークショップ」である。このワークショップでは、動画をテキストで説明するためのフォーマットなどが紹介された。フォーマットは主に3つある。1つ目は問いかけから始まるものである。まず書き手は、「こういうものがあつたらどうだろう？」というような疑問を読み手へ投げかける。次にそれに対する回答、その理由について述べる。そして最後に「あなたはどうか考えるか？」と再度問いかけを投げかけるのだ。このフォーマットは、よく世界平和や環境問題、ユニセフ、禁煙推進などがテーマの際に用いられる。2つ目は結論から述べる方法である。まず書き手は、「ケーキは土でできている」等極端な持論を述べる。次にそのように考える理由、また思考回路を述べる。そして、同じように考えられる他の事例について述べ、最後にその持論からわかる結論を述べる、というものだ。これは自分の独断や偏見について説明するとき、インパクトを与えることができるフォーマットである。3つ目はアンニュイという方法だ。これは自分の目で見たものをそのまま書く、というものである。「〇〇の横に〇〇がある」などその状況をそのまま書くため、読み手の感情をあまり左右しないという特徴がある。このようなフォーマットは星野源がよく用いるようだ。

以上のように、文章を書くためのフォーマットはいくつかあるのだが、共通して注意しなければならないことが3つある。1つ目は、自分の立場の範囲外のことをするということだ。例えば、母親ではない人が「ママは～」というテキストを作ると、実際の母親から批判が来ることがある。2つ目は、知らないことについて書くときは徹底的に調べ上げるということである。誤ったことを書いてはいけなからだ。また、知らないことを調べることができないのであれば、そのことについて書いてはいけない。3つ目は嘘や知ったかぶりはなしということだ。これは2つ目と通ずることもあるのだが、間違っことを書かないようにするためである。

このように三回に渡って行われたワークショップによって、自分の好きという感情を掘り下げること、その好きという要素をもとに動画のテーマをシンプルに立てること、そして完成させた動画を説明するための文章の組み立て方について学んだ。

#### ・動画作成 (8月～9月)

動画のワークショップと平行しながらそれぞれ4～5本を目標に5秒動画の作成を始めた。撮った写真を見返す、構想を練る、他者と話すことで新たなアイデアを得るなど各自思い思いに行動した。動画作成に当たって会社の中だけでなく周辺を散策したり、雨の音を録音したりと自由度の高い活動であった。

中間報告にてその時点で完成していた動画を全員の前で発表し、他人の意見や指摘を受けたことで各々改善点や方向性が見えてきたように思う。最終的には全員が動画を作り終わり、各々個人の個性が色濃く出た代表作とも言える作品を作り出すことが出来た。

#### ・最後に

今回のインターンシップを通して私達は広報の基礎を学ぶだけでなく、周囲の信頼を得ること、働くことなど色々なことを学んだ。約半年という期間、私達がこうして成長することが出来たのはインターンを通して出会った方々のお陰である。

最後に改めて、受け入れ先の関西巻取箔工業株式会社の皆様、動画、フライヤー作成に

当たって指導していただいたアートディレクターの皆様、コーディネーターとして数々の助言をくださった西村先生、大学京都コンソーシアムの皆様に心より感謝を申し上げます。